

入試改革カルテ

早稲田大学

アドミッションポリシー【全学】

本学の教育に耐えうる基礎学力を持ち、本学の理念である進取の精神に富んだ知的好奇心が旺盛であり、同時に、地球社会に貢献する意志が強く勉学意欲の高い学生を世界のあらゆる地域から迎え入れる。



▶1882年、前身となる東京専門学校創設 ▶13学部32学科。学生数は約52000人 ▶2032年に向けた中長期計画「Waseda Vision 150」を2012年に公表
▶THE世界大学ランキング2016-17で601-800位、アジア版2017で131-140位、日本版2017で10位

背景と取り組み

背景	取り組み	指標
①学生の多様性の低下 ②入学が目的化した学生の入学後の「燃え尽き」 ③学部縦割りで全学的な意向が反映されにくい	▶地方にスポットを当てた入試の開発・実施 ▶高校訪問の強化、地方でのオープンキャンパス実施 ▶推薦・AO型入試の拡大(意欲ある人材の確保) ▶各学部と意見交換ができる会議体の設置 ▶教学改革(全学的な基盤教育の整備と提供、学生主体型授業の展開や英語授業など)	▶長期的な努力目標 推薦・AO型入試6:学力型入試4 ▶選抜性を維持するため 一般入試の志願者数10万人以上確保など
APとの整合性	▶原則、AO入試でも学力試験を課す ▶APを常に見直し、それに伴い入試も見直す	
多面的・総合的評価	学力型AO入試を入学センターが実施、選抜	
英語4技能	今後も外部英語検定試験の活用を推進	
入学前教育	課題提出型。基礎学力に問題のある生徒は少ないため、リメディアル教育は行わない	

プロセスとスケジュール

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
ステップ	計画	組織改編・人材育成		入試の多様化	新テストのフィジビリティスタディ				
学内体制	▶中長期計画を策定し、入試制度の抜本改革を掲げる	▶入試改革に向けて専任部署の設置 ▶入試開発検討会設置 ▶共通基盤教育を行うグローバルエデュケーションセンター設置	▶アドミッションオフィサー育成開始 ▶全学IR組織を設置 ▶入学センターで高校訪問開始	→	▶PJ化し各学部職員も高校訪問、全学で危機意識共有				
入試制度			▶留学生向けの奨学金つき大学院AO入試実施 ▶専任部署が設計したセンター試験利用入試を人間科学部が実施		▶文化構想学部・文学部でセンターのみ方式導入 ▶商学部のセンターのみ方式で選択科目の幅を増やす	▶文化構想学部・文学部で英語4技能テスト導入 ▶人間科学部で「学びの力」を総合的に判断するFACT選抜導入	▶複数学部で学力型AO入試「新思考入試(地域連携型)」導入 ▶基幹理工学部で「新思考入試(北九州地域連携型推薦入試)」導入		各入試、成果が出れば順次拡大

How to

全学の改革意識統一

↓高校の現状と危機感の共有

早稲田大学

全学的な入試組織が各学部に働きかけ、入試改革に対する大学全体の姿勢を形成。その背景には高校現場の現実があった。



入学センター副センター長(入試開発オフィス長) **沖 清豪**

おきよたけ●1990年早稲田大学文学部哲学科教育学専修卒。1996年同大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程単位取得退学。国立教育研究所研究員(私学高等教育研究所研究員、同志社大学高等教育・学生研究センター研究員)を経て、1999年早稲田大学に着任。のち文学部学術院教授となり、2012年より現職を兼務。

多様性を高めるための地方に目を向けた入試

本学はAPにも掲げているとおり、「地球社会に貢献する意志が強い」学生を、「世界のあらゆる地域から」迎え入れ、育ててきた歴史があります。日本人においても、全国から多様な学生が集まり刺激を与え合う環境が理想ですが、近年は首都圏出身者が7割を占めます。また、本学に入ることが目的化し、入学後は燃え尽きて留年する学生も一部に見られます。そのことが文系の一般入試で入った学生のデータにも表れています。そもそも私大3教科型入試に特化して勉強してきた学生ばかりだと、学びが画一化するでしょう。それらを解決するため、2018年度から複数学部で「新思考入試」を実施します。学力の合格点

学部の職員が高校訪問 地方のリアルを把握

実は入試改革については90年代後半から各学部で取り組み、地方

は一般入試より低めに抑え、その分やりたいことや、活動内容を課題レポート等で評価するのです。これにより、今まで入学してこなかった層の学生の進学を促します。同入試の「地域連携型」は、地域の課題について問題意識や解決力を持つ高校生の受け入れが目的です。入学後は社会連携プログラム、地域貢献活動などへの参加を支援します。「北九州地域連携型」はこの地域限定の指定校推薦で、入学者は地元での就職を視野に、4年次から北九州キャンパスで研究します。実施状況を見て募集人員とタイプの拡大を検討します。

の高校生対象の奨学金制度も拡充してきました。しかし、地方の学生は増えません。なぜか？ 定性調査の必要性を感じ、まずは入学センター職員5人で地方の高校を訪問しました。そこでわかった東京の私学への無関心さ。この中に入らなっていくか——2016年度からはアドミッションオフィサーの育成も兼ねて、学部の職員にも全都道府県180校を訪問してもらいました。地方では1月まで国立大受験指導、指定校推薦は出さない——。こうした現実と危機感を全学で共有したことが、各学部の改革につながりました。さて、全学の入試窓口である入学センターでは、新思考入試のような全学的な入試を実施する一方、各学部ごとの入試への働きかけも行っています。入試改革の内容も早稲田をめざす高校生への

メッセージですから、全学的な意識統一を図ることも必要です。学部間の垣根を取り払うために効果的だったのは、各学部から入試業務に詳しい教員を集めた「入試開発検討会」の設置です。それまでは、私たちが入試改革案を各学部に直接持ち込んで意見がまとまらないことが多々ありました。そこで検討会で意見をもみ、学部の意見を反映したうえで持ち込むようにしたところ、議論が空転することが少なくなってきました。入試改革は、教学改革の一環。早稲田大生として必要な教養とリーダーシップを培う基盤教育にも力を入れ、入試も教育内容に適合したものにしていきます。伝統やネームバリューに甘んずることなく、高校との接続や社会への影響を勘案しつつ、時代に合った入試と教育をめざします。